

各地で話題の病害虫



アオマツムシによる食害
岐阜県病害虫防除所提供



バショウオサゾウムシ



カソラマルカイガラムシ
茨城県園芸試験場 中垣至郎氏提供



インゲンかき枯病の病葉
北海道立中央農試 真野 豊氏提供

アオマツムシ

学名: *Calyptotrypus hibinonis* Matsumura
英名: Green tree cricket

アオマツムシは、直翅目コオロギ科でスズムシ、マツムシと同じ仲間である。

本虫は、主に関東以西の都市近郊で生息が確認されているが、特に東海地方における分布拡大が顕著になり岐阜県および愛知県下の果樹園でカキやナシの果実を加害し果樹害虫として注目されている。

カキの加害については、幼虫期には新葉を、成虫期には葉および果実を加害する。葉では通常1～4cmの円～楕円形の食孔をあける。果実では直径1～13mm、深さ1～5mmの半球形にくぼんだ食痕を形成し、主に赤道部からへた部にかけて1～5か所散在する。食痕は3～5日で周囲から黒変する。

成虫は体長25～30mmで全身鮮やかな緑色を呈し雄には前翅中央部に半透明の斑紋が現われる。

幼虫はふ化時には体長3.2mm前後であるが、終令(8令)時には18mm前後となる。体型は紡錘形に近い形をしており、体色は1～5令までは真紅色、6令になると腹部上面に黒色の斑紋が現われ黄緑色を帯びる。触角は長く体長の2倍近くある。

発生は年1回で、越冬は卵態、ふ化期は5月下

旬～6月中旬まで、成虫の羽化期は8月下旬～9月下旬の約1か月にわたる。12月上旬ごろまで生存する個体もある。

産卵期のピークは9月中～下旬であり、雌成虫はまず口器によって細枝の樹皮に4×3mmくらいのだ円形の産卵孔を作り、この産卵孔を中心として対角線上の4か所または2か所(稀に3か所ないし1か所)に産卵する。

幼虫・成虫とも夜間活動型で、日中の行動は鈍く葉かげに静止していることが多いが、薄暮からは活発な歩行活動を行う。

防除に当たっては、せん定時に産卵痕をけずり取るか、枝ごと切り取るようにする。

カキ・ナシに適用のある殺虫剤の室内試験ではサリチオン乳剤、MEP乳剤、PAP乳剤などの1,000倍が有効であった。

バショウオサゾウムシ

学名: *Cosmopolites sordidus* (Germar)
英名: Banana root borer

東京都小笠原村では、近年、度重なる台風の直撃を受けてパナナの樹が倒伏・衰弱し、バショウオサゾウムシの異常発生が見られた。

本虫は、アフリカ、東南アジア、台湾、沖縄、小笠原、太平洋諸島、西インド諸島、中南米等に分布するパナナ類の害虫であり、本虫のために

消滅したバナナ産地もある。

小笠原では、明治45年から大正初期にかけて、バナナ萎縮病が猛威をふるい、バナナが一時全滅した。その時、台湾や南洋諸島から輸入した種苗の中に、本虫がまぎれ込んで侵入したのではないかとされている。大正10年ころにはかなりの発生が見られ、その後も発生は継続していた。

成虫の体長は約14mm。黒～黒褐色を呈す。老熟幼虫は白色、茎基部や地下茎をトンネル状に食害する。老熟幼虫の体長は約2cm、トンネル内でまゆを作らずに蛹化する。成虫は日没後飛翔しはじめる。雌成虫は茎や葉鞘に作った小穴に一卵づつ産卵する。

被害園では、被害株の抜取り、焼却を行う必要がある。また、本虫は、茎の傷口から侵入するため、風害を受けて傷ついた株は、処理して、本虫の発生源を断つことが望ましい。

カツラマルカイガラムシ

学名：*Comstockaspis macroporana* (Takagi)

昨年2月、茨城県内で栽培されていたワリの枝からカツラマルカイガラムシが発見され、同県で初めて発生が確認された。

その後の発生調査では、上記発生を含め県内2か所で発生しており、その発生程度も局部的に見られるなど小規模なものであり、侵入の初期に発見されたものと思える。

本虫は、ほぼ全国的に分布しているが、昭和40年頃から中国、四国、九州地方で突然ワリを加害し始めた。なお、この時の発生を防除でおさえていた愛媛県では、57年頃から前回発生地周辺の地域に多発し問題となっている。

ワリでの発生は、枝・幹、特に若木に寄生が多く、1～2年枝に多数寄生すると樹肌が赤褐色となり枯死する。

本虫の発生は年2回といわれており、茨城県では6月中・下旬に第1回の幼虫がみられ、9月頃第2回の発生がある。

雌の介殻は黄褐～黒褐色で、直径が約2mmの円

形、背面がやや隆起し、殻点中央にある。

防除は、越冬期のマシン油剤が高い殺虫効果を示すほか、幼虫発生期にはPAP剤、CVP剤も効果がある。これらの防除により被害が防げるが放置すると大発生し被害を与えるので注意が必要である。

インゲンかさ枯病

学名：*Pseudomonas syringae* pv. *phaseolicola* (Burkholder) Young, Dye et Wilkie

英名：Halo Bright

近年、北海道各地のインゲンに本病が多発し、問題となっている。本病は種子伝染し、まん延力が強いことから、昭和40年前後に大発生し著しい被害をもたらした。

系統増殖による無病健全種子の供給体制を中心として防除対策が図られ、48年以降はごくわずかな発生となっていた。今回の多発の原因としては56年の水害で本菌に著しく汚染された種子が、翌年は種され汚染率が増加し、また天候不順によって発生が助長されたものと考えられている。

第1次感染源は、汚染種子であり、種子伝染株では、初生葉に黄褐色の微小斑を生じ直ちに水浸状小角斑となり、その周囲に黄色のハロー(暈)を形成する。その後病斑は赤褐色となり、株の生育は停止し立枯状となることが多い。この発病株から主に風雨によって次々に伝播され、病原菌の増殖と飛散は低温多湿の気候によって助長される。二次感染株でも葉にハローを伴った特徴ある病斑を生じ、生育初期に病したものは生育悪く、黄化萎縮し多くは開花・着莢しない。茎では赤褐色の条斑を、莢では円形～不整形の水浸状となり、のちに赤褐色の大型病斑となる。

本病に感受性が高いのは、「金時」系品種や「虎豆」で、インゲン以外ではアズキやダイズにも自然発病し、野性のワズにも発病が知られている。

防除には、無病健全種子の生産・更新が最も大切である。カスガマイシン粉衣剤等による種子消毒、病株の早期抜取り、銅水和剤の散布等が挙げられる。